

僕がこれから書く事は、他の人からは軽微な悩みに思われるかもしれませんが、僕にとっては、生きることを諦めたくなる程の苦悩なのです。この問題と向き合うこと自体が非常に苦痛を伴うので、口に出したくなくて、誰にも相談することができませんでした。まして文字に表すことはあまりに受け入れ難く、この手紙を書く決めてからも、ペンを持つ気力も湧かず、ずっと苦しみ続け、言葉にすることができませんでした。言葉にすることというのは、自分の現状を振り返り、その理不尽な状況を肯定することになる。それさえも、今の僕は受け入れられないのだとわかりました。でも、このまま自分が壊れていくのが耐え難いので、なんとか綴ったのがこの手紙です。

『心が壊れる』こんな言葉は、小説の中の大げさな表現だと思っていました。でも今、僕は現実に、こういう言葉しか思いつかない状態にいます。毎日必死に平静を装って、学校生活をこなしていても、日々刻々と自分が壊れていくのが判ります。自分の命を守るための行動が、同時に自分の心を破壊していく。この苦痛からどう抜け出せば良いのか、もう、僕にはわからないのです。

僕は福島県いわき市で生まれ、両親と5歳離れた弟とともに生活していました。当時は、春になれば、テレビで紹介されるほど桜並木の有名な「夜ノ森公園」でお花見をし、夏は潮干狩りに行き、秋はキノコ狩りをして、冬は雪だるまをつくる。公園や学校の帰りの通学路でツクシをたくさん採って帰って、お母さんに作ってもらったツクシの佃煮が好きでした。家も庭も広く、ブルーベリーやシイタケ、ミニトマトなどは庭で収穫する事が出来ました。学校では友達と昆虫を見つけたり、泥だんごを作ったりして遊んでいました。

しかし、2011年3月11日の福島原発事故を境に、このような生活は全てなくなってしまいました。ぼくは福島を離れて避難し、東京の子になりました。政府は僕の街には避難指示を出さなかったけれど、実際に測定した放射能汚染はとても酷く、避難指示区域よりずっと広い範囲に広がっていたので、被曝を避けるためにいわゆる自主避難者になったのです。毎年お花見をしていた「夜ノ森公園」にも沢山の放射能が降り、泥だんごをつかった庭の土は、7年が過ぎた今でも放射能だらけです。しかし、何よりも一番つらかったのは、転校先でのいじめでした。図工の時間に作った作品に悪口を書かれていたり、菌扱いされたりしてきました。些細な事で、一方的に暴力をふるわれたり、差別されたりするので、休み時間に外で遊ぶのが怖くなりました。そのようなことが続き、「出来る事なら死んでしまいたい」と常に思うようになりました。9歳頃の願い事には「天国に行きたい」と書いたこともありました。

今思うと、原発事故避難者について良く知らない人たちの目には、僕たちは「家が壊れていないのだから何も被害は無かったのに、多額の賠償金だけもらって東京にタダで住んでいるズルイ人たち」としか思えなかったのでしょうか。本当は東京電力や国が、放射能汚染の恐ろしさや、汚染の実態を隠蔽しなければ、そして僕たちのような区域

外避難者にはほとんど賠償金が支払われていない事などを、きちんと広く伝えてくれれば、こんな事は起きなかったと思います。同じ時期に転校した避難児童の多くが、程度の差はあれ、いじめを受けていました。親も先生も頑張ってくれたけど、少なくとも僕の場合、差別といじめは小学校を卒業するまでなくなりませんでした。当時の僕は、常に命の危険を感じ、緊張していました。

その生活があまりにも辛かったので、僕は中学生になるときに、今までの学校とは全く違う、遠い中学校に進学し、自分が避難者だということを隠すことにしました。すると、いじめは全く起きませんでした。僕はいじめのない学校生活が、こんなにも平和だったのかと驚きました。初めて出来た友達と過ごす中学校生活は幸せそのものでした。

しかし、2年3年と時が経つうちに、だんだん心が辛くなってきました。自分が避難者であることを隠すということは、自分が福島で生まれたことも、楽しかった幼い頃のこと、本当は広い家が福島にあることも、被曝を避けるために避難していることも、避難住宅に住んでいることも、まだ汚染があつて帰れないのに政府からは福島へ帰るように言われていることも、避難生活自体が不安定で本当はすごく辛いということも、何一つ友人に話せないということなのです。それは、僕の大部分を隠して生きるということです。親友を作りたくても、何一つ、自分の事を言えません。少しでも、自分の思いを語ろうとすると、福島のことを足かせになり、語れなくなるのです。友人たちが政治や経済の話をしていると、すごく自分の思いを語りたくなります。でも結局、うわべだけしか話せない。何故、僕が原発政策に反対する気持ちをもっているのか、その裏にある自分自身の苦しみを語る事ができません。被曝も汚染も、壊されたコミュニティーも、様々な理不尽が、本当は自分の問題なのに、親友に語ることもできない。保身のために、福島の話は話さない、と自分で決めたのに、それを辛いと思う自分自身が許せなくなり、心が砕け散りそうになります。

学校だけではありません。僕が避難や福島のことを話す時は、いつも匿名です。写真も公開できません。自分を隠さないと、世間から大変な誹謗中傷を浴びてしまうからです。僕らは悪いことをしたわけでもないのに、まるで犯人の様に名前も顔も隠さなければなりません。でも、顔や名前を出せない人の証言を、誰が信じてくれるでしょうか？それもまた、大きなジレンマです。本当は堂々と、人々や友人たちに、自分が遭った本当のことを語りたい。でも、受け入れてもらえなかったら、やっと築いた平和な今の生活をまた失うことになる。それは何よりも恐ろしいことです。ぼくは、一体どうすればこの苦しみから解放されるのでしょうか？きっと、同じ苦しみを抱えた子どもは、他にも沢山いるはずなのです。

原発によって儲かったのは大人。原発を造ったのも大人だし、原発事故を起こしたのも大人。しかし、家族が離ればなれになるのも「将来、病気になるかも」と不安の中で生きるのも、学校でいじめに怯えて苦しむのも僕たち子どもです。

残念ながら放射性物質の寿命は、僕たちの寿命より長いのです。被曝の影響が出るのは、10年、20年、40年先になることもあります。だからぼくは、これからも本当に福島が安全になるまで、避難を続けたいと思っています。でも、それを隠しながら生活するのは、もう限界なのです。

何故、ぼくらは、避難しているというだけで、いじめられるのでしょうか。子どもだけではありません。大人達も様々な差別やいじめ、誹謗中傷を受けています。被害に遭ったものが、更にいじめや差別まで受けるのは、何故なのか。それは、原発が国策であり、その被害者の証言は国策を否定するものとなるからです。原発政策をこれからも拡大してゆくために、被害を矮小化し実態を語らせまいとする為政者たちの歪んだ政策やプロパガンダが、大人だけでなく僕たち子どもの世界まで狂わせているのです。

望むと望まざるとにかかわらず、僕たちはこれから、大人の出した汚染物質とともに生きることになります。一方で、僕らの口を塞ぎ、加害を隠そうとする大人達の多くは、本当の被害を見ないうちに先に寿命が来て死んでしまうでしょう。でもそんな逃げ方が赦されるのでしょうか？ 儲けるだけ儲けて、たくさんの嘘をついて、日本だけでなく世界の海を汚したまま、そのつけを全部僕たち子どもに負わせて、先に死んでしまうなんて酷すぎます。

僕の語れない想いは溢れるばかりです。多分、僕の本当の望みは、きっと、ごく普通に隠し事の無い社会で平和に暮らしたい ということだけなのだと思います。でも、原発事故被害者は、今の日本の社会の中で、何かに目をつぶり、耳を塞ぎ、口を閉ざさなければ安全に生きていけません。こんな歪んだ世界から、どうか、僕たちを助けてください。